



## 尿意が不明瞭な事例

### 事例 1 定時誘導しているが失禁が続いている事例

#### 事例と問題の把握

Eさん（84歳、女性）

要介護 4

主な疾患：脳梗塞（右麻痺）、認知症

#### 排泄で困っていること

尿意を自発的に訴えることはなく、尿意の訴えがあっても不確実であったため、4時間ごとの定時誘導を行っていたが、すでに失禁していることが多い。

#### 排泄の状態

2年前よりオムツを使用。8:00、11:30、15:30にトイレで排泄をしているが、ほとんどすでに尿失禁している状態だった。

#### 排泄行動

トイレへの移乗動作は、全面的に援助が必要。トイレでの座位は手すりをもって10分程度は保持できる。

#### 生活状況

日中は、車いすに座って食堂などで生活している。話しかけられると、一生懸命話そうとするが、自ら意思表示を行うことはない。会話の内容につじつまがあわないこともある。

#### アセスメント

2日間膀胱機能評価を実施した結果、平均排尿量は150ml程度、排尿回数3回、残尿はなく、膀胱機能は正常であることがわかった。また、排尿間隔は2～3時間で、誘導時間の間隔を短くする必要があると考えた。

自ら意思を訴えることはないが、問われれば答えようとする、不確実であるがために、尿意を訴えることもあったため、尿意を確かめながら援助を実施する必要性があると考えた。

## 計画

- ① 2 時間ごとに尿意の確認を行う
  - ・尿意の訴えがあった場合はトイレに誘導
  - ・尿意の訴えや反応がない場合は 1 時間後に再度尿意の確認行う。
  - ・4 時間たっても尿意の訴えがない場合は、尿意がなくてもトイレ誘導を実施する
- ②尿意を感じたらいつでも訴えるように促した。



## 実施

援助を始めた直後は、「トイレに行きますか?」「行きたいですか?」など問いかけでもスタッフと目合わせるだけで、尿意に関する反応は示さなかった。援助を開始後 1 週目に 1 度、3 時間たった時点で、問いかけにたして「行きます。」とはっきり意思を伝えることができ、失禁もなく排尿できた。それ以降、徐々に問いかけに対して尿意を訴え、失禁なく排尿ができるようになった。4 週目に入った頃から、そばにいるスタッフに自分から「トイレ連れて行ってください。」尿意を訴えるようになり、日中の失禁はみられなくなった。

## 振り返り

膀胱機能評価を実施する以前は、いつ失禁しているのか分からない状態であったが、ほぼ 2～3 時間間隔で排尿していることが把握でき、短い間隔でトイレに誘導したことによって失禁が改善した。また、尿意を確認することによって、自らも尿意の有無に意識を向けることができ、自分で尿意を訴えることができたようになったと考える。

## 解説

この事例のように尿意の訴えがなかったり、あるいは尿意があっても失禁していたり排尿がなかったりして、援助者が排尿のタイミングをつかめない場合がよくあります。これは尿意を感じていないのではなく、コミュニケーション能力の低下やスタッフに対する遠慮などによって、感じた尿意をうまく伝えられなかったことによって生じていることがあります。しかし、介助者は尿意が不明と判断して、介助者主導でトイレ誘導を行うことがあります。そして定時誘導によって自分では尿意を意識しないでよい状態が続くことによって、膀胱が充満したことで生じる知覚を尿意として感じられなくなっていったと考えられます。

排尿援助の前には、尿意を確認し、高齢者自身が尿意を自分で感じ、コントロールできる機会を提供しながら援助することが尿意を低下させないために重要です。今回の事例のように、わからなくなっていた尿意を意識的に確認することによって徐々に訴えられるようになる場合もあります。

また、この事例では自分で尿意を感じてもらおうという方針で援助を計画しました。その前提には、膀胱がある程度の尿をためることができることが重要です。そのため、事前に膀胱機能評価を実施しました。膀胱機能が維持されていることと援助者との言語・非言語での意思疎通が可能であることが、高齢者の尿意の回復に向けて援助する場合に必要なことと考えます。

## 事例フォーマット

氏名: E	性別: 女	年齢: 82	体重:
主な病名及び既往歴: 脳梗塞(右片麻痺), 認知症, 高血圧症			
服薬中の薬: カマク細粒 1g 2x      トーパールミン(50) 1T 1x ホドニン顆粒 3x      ガナトン(50) 3T 3x			
排泄状況	日中: 脳梗塞発症後よりオムツを使用 8=00, 11=30, 15=30に定時誘導 夜間: オムツ使用し、夜間 2回オムツ交換している。		
排泄で困っていること(本人・家族・スタッフ別に書く) 尿意を自発的に訴えることほなく、向いかけにうなづくこともあるが、 自分で失禁しているのど、定時誘導を行っている。定時誘導時には、 常に失禁している。			
ADLの状態		コミュニケーション	認知症の有無と症状
B-2		自ら意思表示することはない。	IIa HDS-R5
尿意の訴え	尿意を自ら訴えることほないが、問われると返答する。		
便意の訴え	便意を自ら訴えることほない		
トイレの認識ができるか	できない		
移動の状態	車イス。全副介助が必要 便器への移乗は、全副介助		
衣服の着脱の状態	全介助		
便器の準備の状態	全介助		
排尿状態	常にオムツに失禁している。		
排便状態	1~2日に1回 軟便を失禁している。		
後始末の状態	できない。		

# 排尿日誌

①前 平成20年 10月 22日( )

②後 平成20年 11月 26日( )

時間	尿 ml 便 g (失禁)	尿意 便意	水分量	その他 (機嫌 気づき 性状等)
記入例	尿120ml +失禁30ml 便50g	尿○ 便×	茶100cc	便+ オムツはずそうと していた
0:00				
1:00				
2:00				
3:00				
4:00				
5:00				
6:00				
7:00				
8:00	尿 100ml 失禁(+)	尿意 X		
9:00				
10:00				
11:00	尿 160ml 30 失禁(+)	尿意 ○		尿意の確認に うなずく
12:00				
13:00				
14:00				
15:00	尿 100ml 30 失禁(+)	尿意 X		
16:00				
17:00				
18:00				
19:00				
20:00				
21:00				
22:00				
23:00				

時間	尿 ml 便 g (失禁)	尿意 便意	水分量	その他 (機嫌 気づき 性状等)
記入例	尿120ml +失禁30ml 便50g	尿○ 便×	茶100cc	便+ オムツはずそうと していた
0:00				
1:00				
2:00				
3:00				
4:00				
5:00				
6:00				
7:00				
8:00	尿 200ml 失禁(-)	尿意 ○		
9:00				
10:00		尿意 X		確認可も尿意 なし
11:00				
12:00	尿 150ml 30 失禁(-)	尿意 ○		
13:00				
14:00		尿意 X		確認可も尿意 なし
15:00	尿 180ml 30 失禁(-)	尿意 ○		通リかたにスミガキ 自分から尿意訴え
16:00				
17:00				
18:00				
19:00				
20:00				
21:00				
22:00				
23:00				

膀胱機能評価表

1日目

時刻	排尿量 (g)	失禁量 (g)	残尿量 (ml)	尿意知覚の有無	備考 排尿の断え方 排尿方法など排尿に関すること
8:00	-	-	-		
9:00	-	-	0		
10:00	150	-	0		
11:00	-	-			
12:00	-	-	0		
13:00	-	70			
14:00	-	-			
15:00	-	-			
16:00	300	-	0		1回排尿量 173.3g 残尿率 0%
17:00					排尿回数 3回 失禁率 33.3%
18:00					
19:00	-	190			
20:00					
21:00					
22:00					
23:00					
0:00					
1:00					
2:00					
3:00					
4:00					
5:00	-	240			
6:00					
7:00					

2日目

時刻	排尿量 (g)	失禁量 (g)	残尿量 (ml)	尿意知覚の有無	備考 排尿の断え方 排尿方法など排尿に関すること
8:00	-	-	-		
9:00	-	160	0		
10:00	-	-			
11:00	-	-			
12:00	-	60	0		
13:00	-	-			
14:00	-	-			
15:00	-	-			
16:00	120	-	0		1回排尿量 113.3g 残尿率 0%
17:00					排尿回数 3回 失禁率 66.7%
18:00	-	100			
19:00					
20:00					
21:00					
22:00					
23:00					
0:00					
1:00					
2:00					
3:00					
4:00					
5:00	-	340			
6:00					
7:00					